

にはすみをにははせ給へりしげにかくこそかくべかりけれ、あまりにはしる車は、いつかはくろさのほどやは見え侍る。

〔宇治拾遺物語 十三〕今はむかし、歌よみの元輔、くらのすけに成て、かも祭の使しけるに、一條大路わたりけるほどに、殿上人の車おほくならべたて、物見ける前わたるほどに、おいらかにてはわたらで、人み給にとおもひて、馬をいたくあをりければ、馬くるひておちぬ、年老たるもの、頭をさかさまにておちぬ、略○中日のさしたるに、頭きらくとして、いみじう見ぐるし、略○中車さじきのものども、わらひの、しるに、略○下

〔榮花物語 日十〕略た、む月○長和元年十一月の大嘗會御禊など、いみじうよにいそぎたちにつけり、略○中女御代には、おほと○藤原の内侍のかんのとの女○道長いできせ給、女御代の御車廿りやうぞあるを、略○中其日になりて、女御代の御くるまの玄さまよりはじめ、あさましき迄せさせ給へり、その車の有様いへばおろかなり、あるはやかたを造りてひはだぶき、あるはもろこしのふねの形をつくりて、のり人のそでよりはじめて、それにやがてあはせたり、袖にはをきぐちにてまきゑをしたり、やまをた、み海をた、へ、すちをやりすゑて、大かたひきわたしていく程、めもかがやきて、えも見わかずなりにしが、車ひとつが、きぬのかず、すべて十五ぞきたる、あるは唐錦などをぞきせさせ給へる、この世かいのこと、も見えず、てりみちてわたる程のあり様、おしはかるべし。

〔榮花物語 殿上三十一の花見〕長元四年九月廿五日、女院、○一條后上住吉石清水へ詣でさせ給ふ、略○中讚岐守よりくくの朝臣のつかうまつりたる御車に、たてまつりておはします、左右のそばに鏡の月を出してゑがき、いみじきことを盡したり、

〔古今著聞集 興言利十六〕進士志定茂といふさむらひ學生ありける、略○中此定茂、あたらしく車を玄